蕎麦とジャージと真夜中と

poripeimosu

　なんて間抜けな音なんだろう。桜子は、一時はもう食べるのをやめようと思った。しかし、満たされたいと騒ぐ腹の前では、どんな意志の決定も簡単に弾かれてしまう。
　そもそも、何故こんな田舎まで来て蕎麦なんて啜っているのか。普段一人で入ったこともないのに、なぜよりによってこんな最低な日にこんな最悪な食べ物を選んでしまったんだろう。桜子は車も通らないウィンドウの外の暗い通りに視線を移し、自身の愚かさを嘆いた。

　しかし、大崎 肇(はじめ)の部屋を出て、当てもなく歩いていたとき、突然それまで感じたこともないほどの空腹感に襲われ、ほとんど一歩も歩けなくなってしまったのだから仕方がなかったとも言えた。加えて、跪きそうになりながら何とか周囲を見渡した彼女の目に入ったのが、この蕎麦屋だけだったというのも理由の一つと言えるだろう。

辺鄙なこの町で、夜十時を回っても営業している店など、他には見るからに怪しいパブ以外になかった。いや、この店だって十分に怪しい。客が来るとも思えない閑散とした通りで、何故こんな時間に蕎麦屋が営業しているのか。桜子は朦朧とした頭で思い、一瞬躊躇した。だが、目はすでに、暗い夜道の中にぼんやりと明かりを漏らす蕎麦屋に釘付けになってしまっていた。そのときには何かを考える余裕はまるでなくなり、気づいたときにはもう中に足を踏み入れていたのだった。

　啜っていると、いつまでもずるずると音が響いて、それにつられてずるずると昔のことが思い出されていく。一人で蕎麦なんて食べるもんじゃない。多少名の知られた蕎麦らしいが、正直なところ、砂粒を噛んでいるような気しかしないし、ざらざらといつまでも舌に張り付いて、飲み込む度に喉に引っ掛かって仕方がない。と、気管に入ったのか、突如小爆発のような咳が起こった。口内の蕎麦がそこら中に吹き飛び、お気に入りの花柄のワンピースにもみすぼらしい染みが出来た。呼吸もままならず胸が詰まりかけたとき、桜子は今すぐ大崎肇の短く刈られた硬い髪に触れたいと切望した。

　桜子が電車を乗り継いで辿り着いたとき、大崎肇の部屋はすでに空っぽで、彼が最近までそこに住んでいた形跡さえ簡単には見つけることができないほどがらんどうになっていた。その光景に脱力し、思わずフローリングに突っ伏した桜子だったが、埃さえないその床を見て、なんて大崎君らしいと、床に跪き、熱心に埃を取る大崎肇を想像し、湧き上がる愛しい気持ちに恍惚となった。だが想像が加速するほど、もうそうすることでしか彼に会えないのではないかということが浮き彫りになり、愛しさが胸を刺す凶器へと変貌していく。

　それを振り切ろうと口に残っていた蕎麦をほうじ茶で流し込み、桜子はふと店内に目を向けてみた。そういえば、店に入ってこうして中をじっくり見たのは初めてだった。思うと同時に、桜子の視界に一人の若い青年が入りこんだ。歳は二十四、五歳くらいだろうか。ママカットのお手本のように綺麗に切り揃えられた黒髪の青年は、緑色のダサいジャージに身を包み、蕎麦と対峙

していた。

　しばらく観察していると、青年が蕎麦に相当なこだわりを持っていることが分かってきた。この短時間でも、「つゆには蕎麦の先しか入れない」、「麺は一気に啜る」、「五回に一回、茶でリセット」と、容易に三つの癖を見つけられた。やけに姿勢のよい緑の物体が、そうして規則正しく蕎麦を食べている姿はあまりにも異様で、桜子は目が離せなくなった。

　青年はやがて蕎麦を食べ終えると、もう何の未練もないといったように勢いよく立ち上がり、会計に向かうのかと思いきや、だが突然桜子の前でその歩みを止めた。
桜子が何も言えないでいると、彼は断りもなく桜子の向かいに座り、一言、「あなたの食べ方は目に余ります」と言った。

「何ですって？」
「だから、あなたの食べ方はとても汚いと言っているんです、言うべきか迷いましたがね」
　青年はそこで一呼吸置くと、桜子の前に残った乾いた蕎麦や、散らかった食べカスに目をやり、露骨に嫌な顔をした。
「何故、そんなことを言われなければならないのよ」
　桜子は思った以上に自分の声が震えているのに、ますます動揺が強まるのを感じたが、話しだすと止まらなかった。「大体、失礼じゃないの。一人で来て、一人で食べてるんだから、別に何でもいいでしょう。美しかろうが汚かろうが、関係ないわ！　特に、あなたみたいな他人には本当に関係ないわよ」

　桜子が黙ると、店内はすぐに平穏を取り戻した。店主は一体どこに消えたのか、その気配さえ感じられない。桜子は拭いきれない場違い感が大波のように迫ってくるのを感じた。自分だけがこの空間に馴染んでいない。弾かれている。私はいつもそうだ。どうしてこうなってしまうのだろう。
　青年はしばらく黙って放心した桜子の顔を見つめていたが、突然桜子から箸を奪うと残っていた蕎麦を丁寧に五本ほどつまみ、その先だけつゆの中に沈ませ、それを力任せに桜子の唇に押し付けた。

「さあ、一気に啜ってください。ああっ、喋らないで」今にも反論を口にしようとしていた桜子を止め、青年は早口で続けた。「そうですね、例えばストローにつまったタピオカを吸い上げるときを思い出してください。あるいはエビの頭につまったみそを吸いこむときのようにズッといくんです、ズズッと」
　青年は懸命に口を窄ませ、吸いこむ真似をしていた。タピオカがストローにつまったことも、エビのみそなんてものも吸ったことがないから分からないわ。桜子はそう青年に告げたかったが、青年の剣幕に圧され、言われるがまま蕎麦を口に含み、一思いに啜った。

「あれっ」桜子は、口の中で弾けたように広がった甘味と大地を思わせる野趣に富んだ香りに、思わず感嘆の声を漏らした。「なんか……すごく美味しいわ！」
　強く噛みしめ、何度も咀嚼しなくても、喉を撫でるようにつるんと胃袋に落ちていく。
「そうでしょ、美味いでしょう？」身を乗り出し、青年は得意げに言った。
「確かにこんなに美味しい蕎麦を味わったことは、これまでに一度もないわ。でも何故なの？　蕎麦は先ほどと同じものなのに」
「それは、正しい食べ方をしたからですよ」
　青年は満足そうに腕を組み、二、三度深く頷いた。それを感動に沁み入った様子で見ていた桜子だったが、やがて興奮が冷めていくと、この不躾な青年のペースにすっかり乗せられていることにだんだん腹が立ってきた。

「正しい食べ方ねえ。そんなもの必要なのかしら」
「必要ですよ」青年は即答した。「現に、あなたはまさに今、その正しい食べ方でオーガズムを感じたんじゃないですか」
「ねえ、オーガズムとか言わないでくれる？　まあ、確かに美味しかったわよ、すごく。でも、所詮蕎麦じゃないの。正しくある必要なんてあるかしら。別に不味くたって良かったのよ、私は。腹が満たされたならそれで」

「あなたは何も分かっていない」青年は顔の前で手を組み、大切な商談の破談を嘆くように項垂れて見せた。「まずあなたの間違いは、蕎麦を食べる行為が端から孤独で虚しくて淋しくて格好悪いものだと考えていることですよ」
「何よ、馬鹿馬鹿しい。蕎麦に失礼だとでも言うつもり？」
「言いませんよ。そんなことだから大崎君に逃げられるんです」
「何ですって？」

　桜子が思わず目を丸くすると、青年は失敗を後悔するように顔を歪めたが、やがて大袈裟なため息をついた後で、
「あなたでしょう、自分を大崎君の彼女だと思い込んで、彼にしつこく付きまとっていた人は」
「あ、あなたが何を言っているのか、全然分かんないわ！」
「でも僕には分かるんですよ、残念ながら。だって、ほら、写真もあるし」
　青年は白々しくそう言って、緑色のジャージの尻ポケットから折れ目のついた一枚の写真を取りだした。そこには確かに桜子が映っていて、ご丁寧に「この人がストーカーの桜子さんです」と付箋紙が貼られていた。それが、大崎肇が書いたものだと桜子は一目で分かった。彼の字は男にしては丸っこく、癖が強い。

「何よ、これは。あなた一体誰なの」

「あなただって、本当はいつもどこかで正しさを求めているはずです」
　青年は桜子の問いには答えず、一人で納得したように言ってから、自分が大崎肇の隣人であり、もし桜子が訪ねてくるようなことがあればフォローを頼まれていたことを話した。動揺に震えながら聞いていた桜子だったが、大崎肇のアパートに押しかけたとき、何度かこの緑色のジャージを着た男を目にした記憶があることに思い至った。

「まあ、大崎君は本当に良い人で世話にもなりましたが、正直僕はどうでもよかった。だから、見張りを放り出してここで蕎麦を堪能していたんですがね。まさかあなたがここに立ち寄るなんて思わなかったから、僕だって驚いたんです。だから、そう、つい魔が差したわけですが、そのついでに言わせてもらえば、あなたは自分がそうして正しさを求めていることを早く認めるべきです」
「あ、あなたに私の何が分かるというの」

　口に出すと、悔しさか淋しさか分からないもので胸が満たされ、涙が溢れてくるのを桜子は感じた。一方で、この目の前の男を詰問するよりも先に、認めたくない事実から逃れられなくなっていることに気づく。
　本当はこうして誰かと話がしたくて堪らなかったのだ。そして叶うなら、誰でもいい、誰か自分という愚かしい女の行いを徹底的に非難してくれと渇望していたことを。桜子は落涙を青年に見咎められないように、素早く顔を伏せた。顔が火照り、紅潮していくのを止められなかった。

「とにかく、蕎麦は一人で食べるものなんですよ。それが正しいんです」
　青年は冷静な顔をして言うと、桜子の伝票を手にし、立ち上がった。そして、滑るようにボックス席を出た。だが数歩行ったところで一度桜子を振り返り、少し迷いを見せた後、
「だから存分に一人で食べて、正しさに身を投じればいい。そうすればあなたはもう大崎君を困らせなくて済みます。大丈夫、“カワイイはつくれる”んです」

　女性向けのヘアケアＣＭのキャッチコピーを、似合わない微笑を浮かべながら言って颯爽と去っていく。そのやけに姿勢のよい緑色の背中を茫然とした眼差しで追いながら、桜子は不意に、もう店の平穏をうるさく感じていないことに気づいた。そして、もしかしたら本当にこのまま正しさに身を投じられるかもしれないと期待を抱き始めた身体が、過去にあれほど恐怖した独りに慣れようとしているのを感じている。
　孤独な夜の、孤独な蕎麦も悪くない。桜子は教わった食べ方で残った蕎麦を啜りながら、再び独りきりの寂寥の中で、不器用に恍惚に溺れた。（了）